



# 悲しみの湧き水で洗われる世界

作家 志茂田景樹

別の町から越してきて中学に入った僕は友達がい人もいなかった。そのことと体が小さく虚弱だったこともあっていじめを受け、学校へ行くのが辛くなった。

ある日の昼休みに、いじめっ子達から避難したい気持ちから学校の図書室に入った。棚の本の背表紙を見て回ってすぐに、僕は「新美南吉」という著者名に関心をそそられた。

(新しく美しい)

とは何とない言葉だろう。いじめから逃れたいという思いが新しく美しい世界にいる自分をイメージさせたのかもしれない。

そうして抜き取った童話集で『ごん狐』をはじめとしていくつかの新美南吉作品と出会った。

どの作品も僕には悲しく切なく、とりわけ『ごん狐』の結末には涙を誘われた。(何で撃っちゃうんだよう！)

心で叫んだが、それはけして兵十を咎め

たものではなかった。

悲しく切なくてもそのときの全作品が僕の心に美しく染み込んだ。それはどうしてだったろう。

高校に進学してまもなく新美南吉の作品を読み返したことがある。それまでに読んだ作品に限ったことで、作品の数にしても三十点に届かなかったと思う。

新美作品には『仔牛』『里の春、山の春』

などのように、ほのほのとして心が温かくなるような作品も多いのに、いやむしろ、そういう作品のほうが主流なのに、やはり、読後は悲しく切ないものが胸に染みてくる。それが新美南吉の作品の魅力であり、かつ秘密に僕には思えた。

高校から歩いて十五、六分のところに谷保天満宮があり、その頃、そこへ散策に行った。拝殿の横手のほうに湧き水の小池があつて山葵が栽培されていた。水が湧いているところは水面がぼこぼこ盛り上がり

ていた。

そのさまを見ているうちに、新美南吉は湧き水のようにあふれる悲しみに物語を紡いでいたのではないか、とはつと思つた。その悲しみは新美南吉のとても深淵で純粋な人間性から湧き出ているもので、悲しく辛い気持ちで読んだ読者のその悲しみ辛ささえもきれいに洗い清める力を持っている。ずっと後年になって僕は読み聞かせ活動を始めたが、自作の童話を読み聞かせるときも新美南吉の悲しみの力を借りている。



しもだ かげき

一九四〇年、静岡県生まれ。中央大学法学部卒。一九七六年、『やっこ探偵』で小説現代新人賞を受賞し、執筆活動を開始。一九八〇年、「黄色い牙」で直木賞受賞。「よい子に読み聞かせ隊」を結成し、全国各地で読み聞かせの活動を行っている。